

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『故郷は「母」』

神奈川県

阿部 松代

故郷は「母」

阿部 松代（あべ まつよ）

大学時代は千葉市内の寮で過ごした。神奈川県内の自宅から通えない距離ではなかったが、学校生活を謳歌したくて入寮した。

そこには日本各地から学生が集まっっていて、長期休暇のあとは故郷のお土産を持ち寄っておしゃべりをするのが恒例だった。

「これ、うみゃあよ」

「うちのも食べてみ」

帰省中の名残か普段より方言が飛び交い、故郷自慢が始まる。特に石川県出身のK子はたくさんのお土産を披露しながら饒舌だった。彼女は地元が大好きで、結構な頻度で帰郷していたがそのたびに元氣になつて戻ってくる。

「石川は私の原点。力が湧いてくるの」

故郷が持つ力を感じて、そういうもののあるK子が羨ましかった。父親の転勤などで引越しの多かった私には、ここが故郷だと胸を張って言える場所がなかったのだ。

「K子はいいな。私はいろんな所を転々としたから故郷がないんだよね」
すると、言われた。

「故郷がいつばいあるってことじゃん？ 故郷は一つとか、何年以上住まないとダメなんて決まりはないよ」

以前、住んでいた場所の一つひとつが頭に浮かんだ。それぞれに思い入れがあり、どこも私にとってかけがえのない場所ではないか。

以降、「故郷」に対して特別な感情を持つことはなくなっていたが最近、その気持ちに少し変化が起きた。母が認知症になり、故郷の力を再発見したのだ。

母は広島で生まれ育った。幼い頃に原爆を経験、父親が病死して母親が再婚。その後は継父との関係で辛い思いを何度もしたと聞く。そして同郷の父と結婚して上京。原爆病の父を支えながら家事や家計を切り盛りしてきた。

母は広島が大好きで、野球オンチなのにカープファンだったし、広島出身のスポーツ選手や芸能人を応援していた。子どもの頃の楽しかった思い出を聞くことも多かった。

しかし私が二十歳の時、祖母が亡くなり、遺産相続で親族とトラブルが起きて以来、母はパタリと広島の話をしなくなった。母の兄弟は、母以外はみな広島に住んでいて結束。母だけがアウェイ状態になっていたようだ。詳しくは話さなかったが、広島で話し合いを終えて帰ってきた時のひどく疲れた顔、さぞかし大変だったに違いない。

それからというもの、テレビで広島映像が流れるとチャンネルを変えたり、広島に関係するものを封印したりするようになり、「広島とは縁を切ったから」ときっぱり。よく出ていた広島弁もあまり聞かれなくなった。

以来、親族と冠婚葬祭以外はほぼ連絡を取らないまま三十年以上が経つ。母は今年で八十三歳になるが、三年ほど前から急に物忘れがひどくなり、病院で診てもらったところ、認知症と診断された。

疑心暗鬼になり、幼子のようなウソをつく。お金に対する執着が半端なく、これまで頑張

って生きてきたのにイヤなことばかりだと愚痴を繰り返す。「イヤなこと」は母の妄想だ。医師に言われた。

「認知症によく見られる症状ですよ。ただ、そこには、なにかあるのでしょうかね」

母の人生は苦労の連続だった。家計のやりくりで苦しんだ経験がお金への執着に繋がっているのかもしれない。そして、懸命に家を支えてきてくれた母に対して、私は照れ臭さもあつてきちんとお礼を言ったことがない。不満げな様子を見せたことのない母だが、本当はもつと労ってほしかったのかもしれない。その反動がいまの症状に出ているのだろうか。

その後、母がいつもの愚痴を言ったとき「これまで家族のために頑張ってくれてありがとう」と頭を下げると母が頷いた。

「頑張ってきたんよ、頑張ってきたんよ」

そう繰り返しながら、顔が徐々に穏やかになっていく。その表情を見ていて、大人になるというのは衣を重ね着していくようなもので、認知症になった母はいま、それを一枚一枚脱いで素の自分に戻っていつているのかもしれないと思った。

最近、母が広島の話をよくするようになった。すべて、子どもの頃に幸せだった時のこと。最近のことは忘れても昔のことはよく憶えている。兄弟でかくれんぼをしたことや背負っていた弟にお漏らしされたこと、夏休みの宿題を兄がやってくれたこと……。

それらは、広島とまだ「縁を切つて」いなかったときによく聞いた話だ。その時は「何度も聞いたよ」などと話を遮っていたが、今では母の穏やかな顔を見られる貴重なひとときだ。母に「故郷」が戻ってきたと嬉しくなる。そして、辛かった過去ではなく、よかった頃の思い出だけを楽しそうに話す様子に母のポジティブさの原点を感じて、ハッとした。

「私の原点は、母が作ってくれたんだ」

引越すたびに新しい環境になじむのに時間がかかった私は、以前の所と違って嫌なところを挙げてはため息をついていた。そんなとき母はいつも笑った。

「違つて面白いねえ」

すると、こちらまでそう思えるようになる。そして、私が周りに合わせようと頑張っていると、首を横に振る。

「マイペースでいいの。まわりがこの子はこういう子なんだって、わかってくれるから。そうしてできる友達が本物だよ」

母のアドバイス通りだった。いつの間にか親友ができ、生活が楽しくなってそこが好きになった。その時々を思い出すと温かい気持ちがおみ上げしてくる。こういう私に育ててくれたのは母だ。そしてなにより、辛いことがあっても実家に帰って母と会えば力が湧いた……私の故郷は「母」なのだ。

子どもの頃の話を通りし終えた母の顔は明るくなっていた。認知症が母に返してくれた「故郷」。その「故郷」が母を笑顔にする。そして、そんな母から私は元気をもらう。